

# 2019 年度入学者選抜方法の妥当性の検証

2021 年 6 月

山梨学院大学 学習・教育開発センター

## 1. 検証の目的

2019 年度入学者選抜試験の妥当性を検証するために、選抜区分間で入学後の学習成果に差がないか、1 年次および 2 年次についてパネルデータを用いて検証を行った。1 年次の学習成果の指標として入学時アンケート、1 年次終了時点の GPA および PROG テスト（受験時期は 1 年次 4 月）、2 年次の学習成果の指標として 2 年次終了時点の GPA の結果を用いて、年次別に各指標と選抜区分のクロス分析を行った。

## 2. 結果の概要

選抜区分ごとの学習成果をクロス分析した結果、次のことが分かった。

### 1 年次

- 入学時アンケートから「高校までの生活充実度」に選抜区分による統計的な有意差が認められた一方、「アクティブラーニング経験」「読み書き経験」「学びの主体的態度」には有意差が認められなかった。
- 1 年次終了時点における GPA において、選抜区分に統計的に有意な差が認められた。
- PROG テスト・リテラシーにおいて、選抜区分に統計的に有意な差が認められた。
- PROG テスト・コンピテンシーにおいて、選抜区分に統計的に有意な差が認められた。

### 2 年次

- 2 年次終了時点における GPA において、選抜区分による平均値に統計的に有意な差がみとめられた。

## 3. 選抜試験区分ごとの入学者数

各学科の選抜者試験区分ごとの入学者数は次の通りである（各入試区分において、試験の実施時期や種別等が複数ある）。なお、妥当性の検証は、全学科の入学者数を合計して行った。

選抜区分	学科名						合計
	法学科	政治行政 学科	経営学科	管理栄養 学科	国際リベ ラルアーツ学 科	スポーツ科 学科	
一般入試	34	23	37	19	1	28	142
推薦入試	8	4	0	25	2	19	58
センター方式	27	12	15	1	1	13	69
AO入試	12	18	37	0	0	97	164
強化指定	93	56	66	0	0	68	283
指定校推薦入試	45	29	12	0	0	0	86
系列校推薦入試	18	17	94	0	0	0	129
その他	4	8	1	0	4	0	17
留学生	14	2	85	0	0	0	101
合計	255	169	347	45	8	225	1049

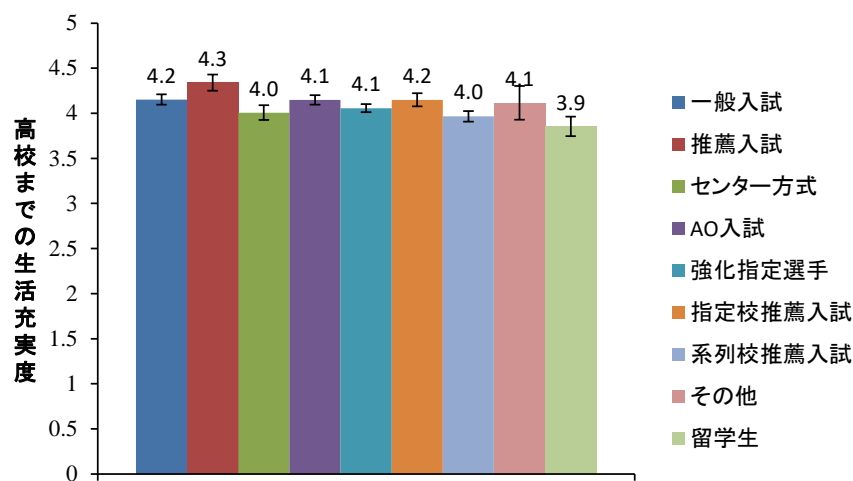
#### 4. 1年次

##### 入学時アンケート

高校までの学習経験・行動について、入学時にアンケート調査を行った。

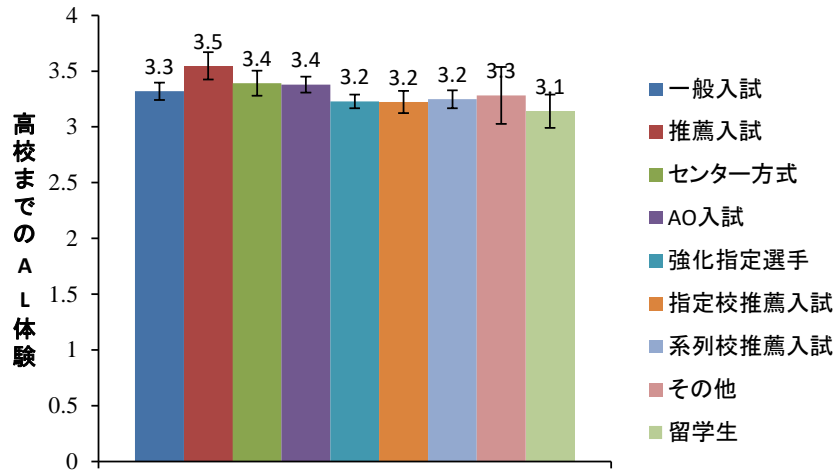
##### Q1 高校までの生活充実度 (1.充実していなかった~5.充実していた)

回答の平均値を選抜区分ごとに示した (エラーバーは標準偏差)。質問への回答を従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった ( $F(8, 898) = 2.656, p < .01, \eta^2 p = .023 [.002, .037]$ )。このことから、選抜区分によって回答の平均値に差があることが示唆される。



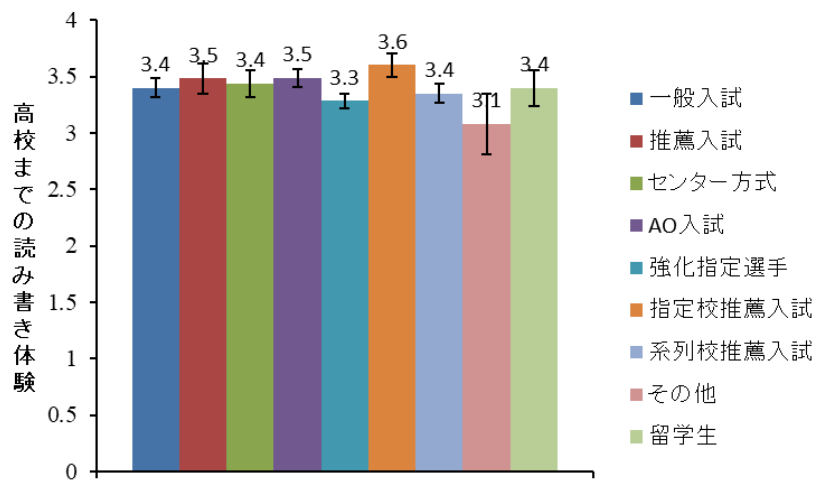
##### Q2 高校までのアクティブラーニング経験 (1.全く経験しなかった~5.頻繁に経験した)

回答の平均値を選抜区分ごとに示した (エラーバーは標準偏差)。質問への回答を従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった ( $F(8, 898) = 1.180, p = .308, \eta^2 p = .010 [.000, .018]$ )。このことから、選抜区分によって回答の平均値に差がないことが示唆される。



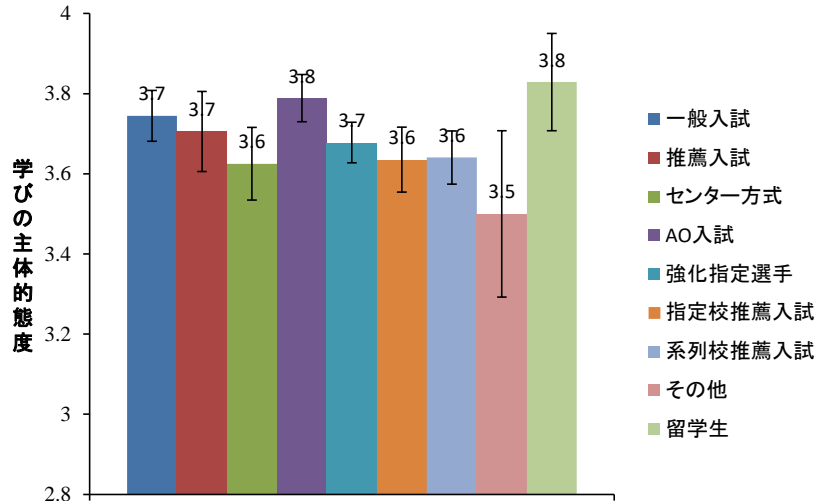
Q3 高校までの読み書きの経験 (1.全く経験しなかった~5.頻繁に経験した)

回答の平均値を選抜区分ごとに示した (エラーバーは標準偏差)。質問への回答を従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった ( $F(8, 898) = 1.271, p = .255, \eta^2 p = .011 [.000, .019]$ )。このことから、選抜区分によって回答の平均値に差がないことが示唆される。



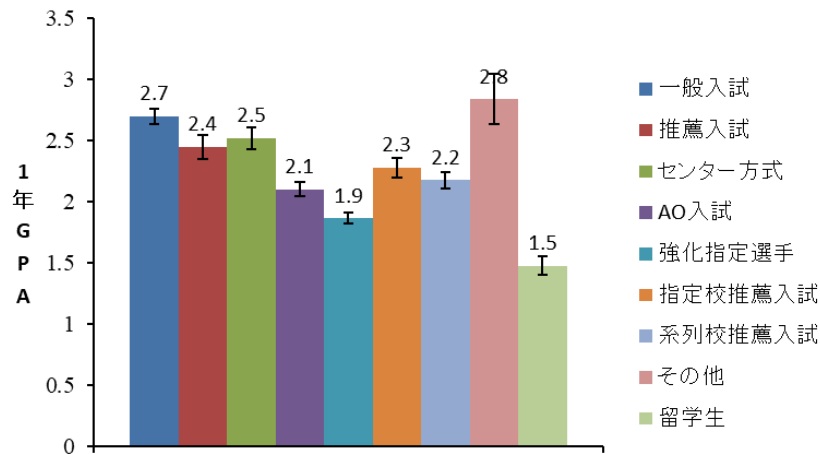
Q4 学びの主体的態度 (1.先生から教わりたい~5.自ら学びたい)

回答の平均値を選抜区分ごとに示した (エラーバーは標準偏差)。質問への回答を従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった ( $F(8, 898) = 0.893, p = .552, \eta^2 p = .008 [.000, .013]$ )。このことから、選抜区分によって回答の平均値に差がないことが示唆される。



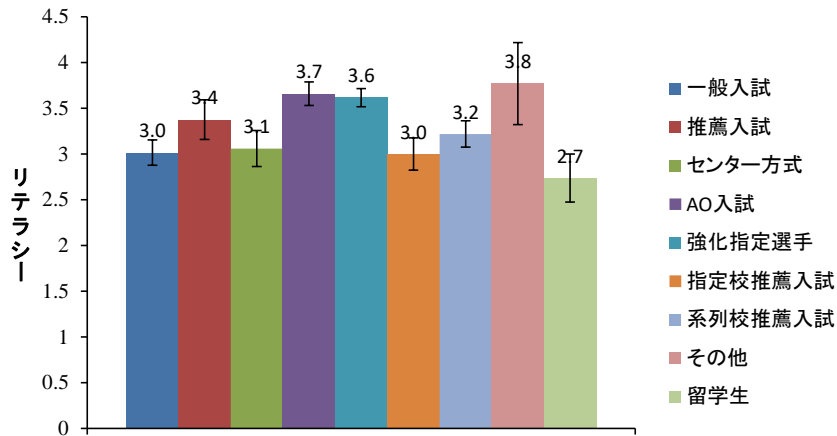
### 1 年次終了時点 GPA

1 年次終了時点の GPA の平均値を選抜区分ごとに示した(エラーバーは標準偏差)。GPA を従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった ( $F(8, 1032) = 30.339$ ,  $p < .000$ ,  $\eta^2 p = .190$  [.144, .226])。このことから、選抜区分によって GPA の平均値に差があることが示唆される。

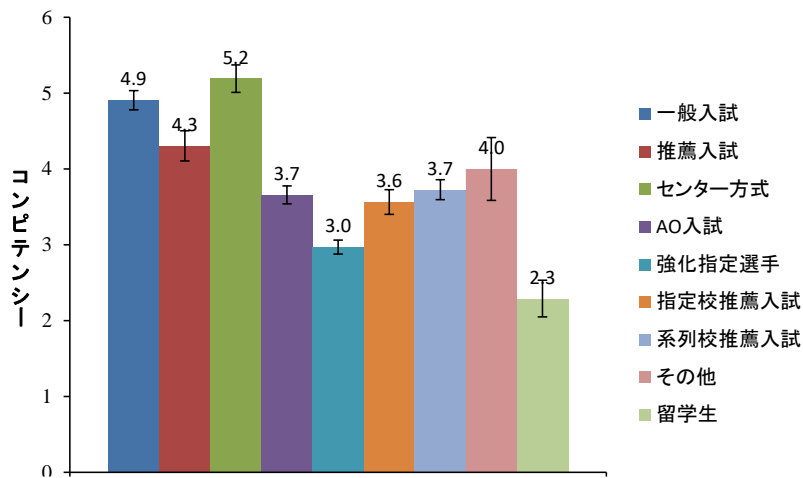


### PROG テスト

1 年次の PROG テスト・リテラシーの平均値を選抜区分ごとに示した (エラーバーは標準偏差)。リテラシーのスコアを従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった ( $F(8, 924) = 4.038$ ,  $p < .000$ ,  $\eta^2 p = .033$  [.008, .050])。このことから、選抜区分によってスコアの平均値に差があることが示唆される。



1年次のPROGテスト・コンピテンシーの平均値を選抜区分ごとに示した(エラーバーは標準偏差)。コンピテンシーのスコアを従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった( $F(8, 924) = 33.354, p < .000, \eta^2 p = .220$  [.170, .258])。このことから、選抜区分によってGPAの平均値に差があることが示唆される。



## 5. 2年次

### 6.

#### 2年次終了時点 GPA

2年次終了時点のGPAの平均値を選抜区分ごとに示した(エラーバーは標準偏差)。GPAを従属変数、選抜区分を独立変数とする一要因分散分析を行ったところ、主効果は有意だった( $F(8, 1001) = 15.078, p < .000, \eta^2 p = .108$  [.068, .138])。このことから、選抜区分によってGPAの平均値に差があることが示唆される。

